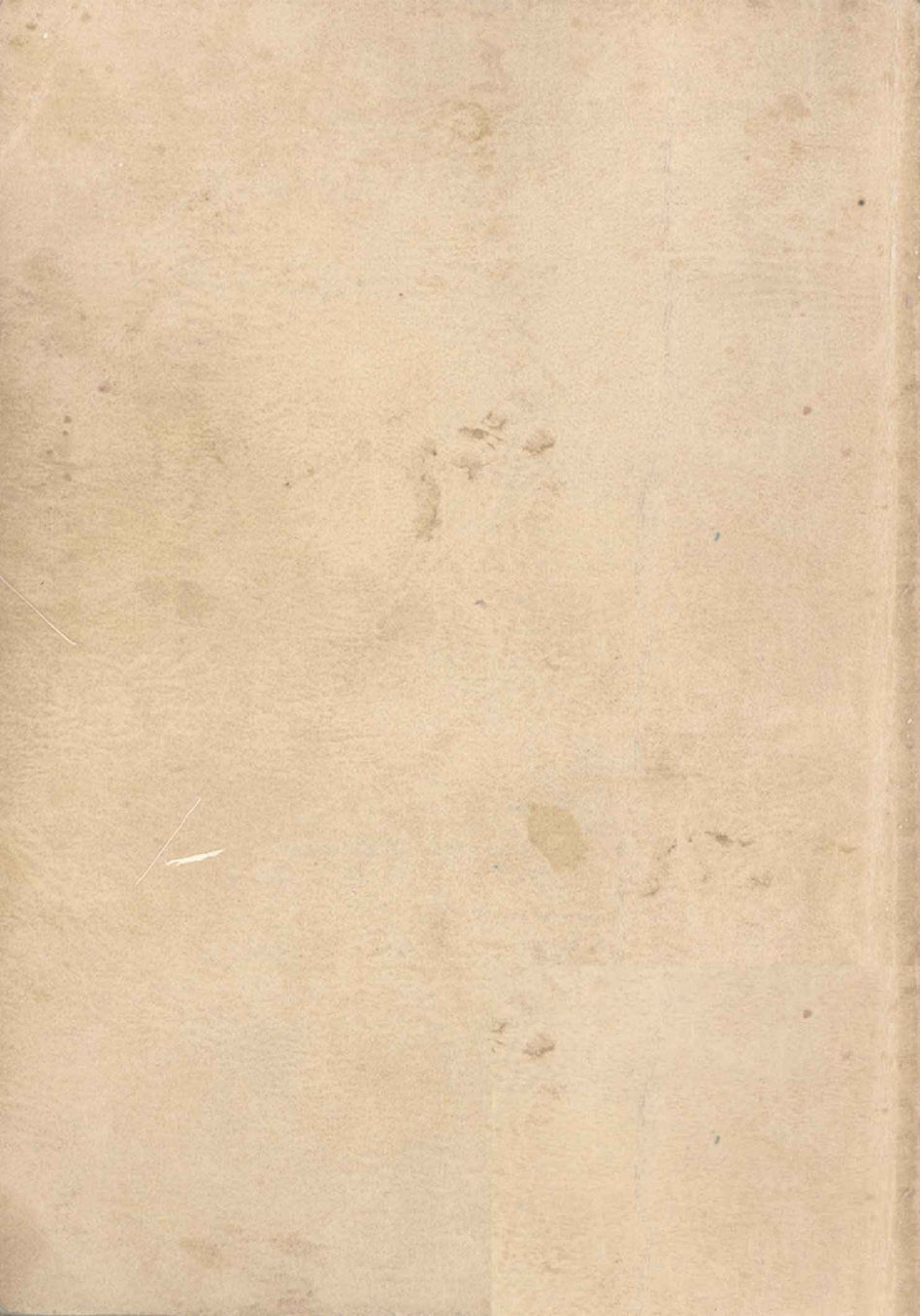
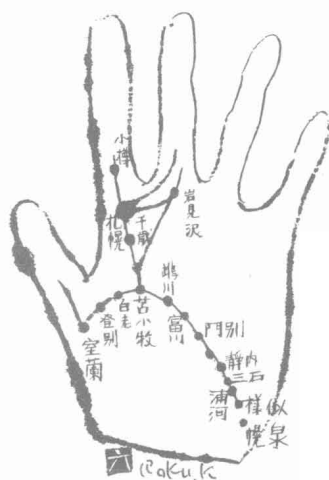




いつにな 過去に涙を

笹沢左保



昭和四十六年一月十日発行

いつになく過去に涙を

定価五四〇円

著 者 © 笹 沢 左 保

東京都小平市学園西町一六三五

装幀・挿絵 貝 原 六 一

発 行 者 徳 間 康 快

本文印刷 図書印刷株式会社

カバー印刷 長 野 印 刷

製 本 所 ナ シ ヨ ナ ル 製 本

発 行 所 徳 間 書 店

東京都港区新橋四ノ一〇
電話代表(四三三)六二三一
振替 東京 四四三九二

乱丁・落丁本はお取りかえいたします。

検印廃止

0093 - 128359 - 5229

いつになく過去に涙を

第一章 叛逆のバラード

I

その男は、飛行機が羽田空港を離陸したときから、ずっと目を閉じたままだった。眠っているわけではなかった。その証拠に、右手だけをタマに動かしていた。ただ、ひどく疲れているようだった。真黒に日焼けした顔だが、窪んだ眼窩がんかの周囲が更に黒ずんだ限くまになっていた。

彫りの深い顔立ちだが、どことなく投げやりな冷やかさが感じられた。黒いコートの衿を立てて、そこに油すまつ気のない髪の毛の頭が埋まっていた。どんな職業についているのか、すぐには見当がつかない隙すきだらけの雰囲気であった。

飛行機を利用する旅行者にしては、目的地へ心を馳はせているという張りのある姿勢に欠けていた。始発電車で出勤する二日酔の男、という感じであった。目的地もなく、ただ疲れを癒やすた

めに飛行機に乗っている。そんなふうにも見えた。ぼんやり考え込むにせよ、一時間も同じ姿勢を保っていることは難しいものである。

男は、タマに右手を動かす。その右手の甲や掌てのひらの上を、小さな生きものが跳び歩いていた。小鳥である。全身白色で、嘴くちばしだけが桃色の文鳥だった。手乗り文鳥は、何かの気配を感じると急いで男の右腕伝いに逃げた。コートのポケットの中へもぐり込んだ。

規則を厳守するならば、籠にも入れずに小鳥を客席へ持ち込むことは許されていない。しかし、男の手許から飛び立とうともしない文鳥となると、乗務員もあえて咎めようとはしなかった。スチュアーデスが近づいて来ると、文鳥は慌あわてて男のコートのポケットの中に隠れてしまう。それに気づいても、スチュアーデスはただ微笑するだけだった。

機内の席は、八分通り埋まっていた。女は二、三人だけで、あとは中年の男が殆どであった。新聞や雑誌を読んでいる者が多く、窓の外を覗のぞいたりする乗客はいなかった。それだけ旅行馴れている者ばかりであって、事務的な旅行目的で先を急いでいる乗客たちという証拠であった。

四月とは言え、北海道はまだ観光シーズンではない。それに、札幌千歳ちよさき行きの日本航空最終便である。物見遊山に出かける旅行者が利用するには、あまり適していない飛行機だった。女連れが少ないのも、そのせいに違いなかった。

羽田発十九時二十分で、札幌千歳空港着は二十時三十五分であった。着陸のためのベルト着用

がアナウンスされると、男は初めて凭れかかっていたシートから背中を離した。目を閉じたまま、ベルトを締め直した。左手だけを使って文鳥のいる右手は肘掛けの上に置いていた。

通路の反対側の席にいた女が、男の掌の上を跳び回る文鳥を目で追った。いまが初めてではない。女は三十分も前から、文鳥の動きを観察し続けていたのである。女には連れがなく、ひとり旅の退屈しのぎに文鳥を眺めていたのであった。

しかし、そうしながら女の表情は、まったく変化しなかった。動物とか赤ン坊とかが見せる無心な生態は、観察していてなかなか興味深いし、また可愛らしいものである。思わず微笑したり、顔を綻ばせずにはいられないのが普通であった。

特に、女は可愛らしいものに対して、そうした反応を示しやすかった。だが、この女は別だった。退屈しのぎに文鳥を見守っているには違いないが、その目も表情も完全に死んでいた。文鳥に視点を置いていてだけで、何も感じていないという顔だった。

二十六、七歳だろうか。ハーフがかった美人である。形のいい鼻をしていて、やや厚めの唇が吸ったら溶けてしまうように柔らかさそうであった。色白の顔に、化粧気はまったくくない。睫毛が長く、大きく見開かれている目には神秘的な暗さと冷たい情熱といったようなものが同居している。

全体的に陰気という印象を与え、憔悴した女の艶っぽさを感じさせた。長い髪の毛を、紫色の

ベルベットのコートの中に散らしていた。脚にびったり密着する白いブーツをはき、大型の黒いバッグを両腕でかかえ込むようにしていた。

やがて、女は文鳥から目を放して、心持ち身体を固くする姿勢をとった。機内が妙に静まり返り、乗客たちが言い合わせたようにじっと動かなくなる。飛行機が着地する直前の緊張した一瞬だった。足の下でゴッソンという音がして、軽い衝撃が機体を揺すった。

間もなく、機体が完全に停止した。乗客たちが一斉に立ち上がって、通路に列を作った。文鳥を掌の上にのせた男は、依然として目を閉じたまま動こうとしなかった。何も慌てて立ち上がることはない。最後に、通路を邪魔されることなく歩いて飛行機から降りればいい。

と、そのようなつもり乗客は、ほかにも数人いた。通路を隔てて男と並びの席にいた女も、そのうちのひとりだった。奥の席にいた乗客が、女の膝をまたいで先に通路へ出た。女はもう文鳥などに興味もないらしく、考え込むように俯向^{うつむ}いていた。

五分もたたないうちに、機内はガランとなった。残っていた四、五人が、ゆっくりと立ち上がった。女も、通路へ出て歩き出した。ようやく、文鳥を掌にのせた男が目を開いた。目を開くと、年齢がはっきりわかる顔になった。三十、あるいは一つくらい若いのかもしなかった。

男は、いかにももの憂いといった感じで腰をのびした。立ち上がると、男はかなりの長身であった。一メートル八十以上はあるだろう。ただ肥満型ではないので、大男というよりノッポと表

CHITOS AIRPO



JE

Rock
U.K.

現したほうがピンと来る身体つきであった。

男は大股に、乗降口へ向かった。彼が、いちばん最後であった。手ぶらである。掌の上に、文鳥をのせているだけだった。乗降口で挨拶をした二人のスチュアーデスが、文鳥を見て微笑を浮かべた。男は肩を落して、タラップを降りていった。

空港ターミナルは、閑散としているはずだった。いま到着したのが東京からの最終便であり、あと四十分ほどして千歳発の最終便が出るだけなのである。まだ観光客が少ない北海道の空港で、華やかな送迎風景は見られないのである。

だが、今夜はいささか違っていた。ロビーにいる一般の人たちは、その数も少なかった。しかし、人が少ない割りには、閑散とした感じがしないのである。それは、ただ時間の経過を待つというダレきった空気が、ロビーにはないからだった。

人々は明らかに緊張していたし、何かが起るのを期待するかのように好奇の目を光らせていた。そうした一般の男女のほかに、思いも寄らなかった制服姿があちこちに見受けられた。警官である。ターミナル全体を監視するように、制服警官が要所要所に立っているのだった。

特に、ターミナルの入口付近は、五、六人の警官によって固められていた。私服刑事も、その中に数人まじっていた。入口の外には、何台かのパトカーが停めてある。私服刑事たちはさりげなく、だが鋭い眼差しで到着便の乗客たちに目を向けていた。

ターミナルから出て行くには、どうしても入口付近を固めている警官の前を通り抜けなければならぬ。声もかけられずに無事通過した人々は、通り抜けてから改めて何事があったのかというように警官の列を振り返った。

だが、乗客の殆どがまだ手荷物受渡所の周囲に残っていた。誰もが不安そうに警官の列のほうを見やりながら、自分の荷物が目の前に現われるのを待っている。まったく無関心という顔つきでいるのは、右手の掌に文鳥をのせた男ぐらいなものだった。

その男のすぐ脇に、ピツタリと寄り添うようにして女が立った。紫色のベルベットのコートに、白いブーツをはいた女だった。長身の男の胸のあたりに、やや小柄な女の頭が押しつけられていた。

「お願い……」

女が、男の顔を見ずに小声で言った。低くて、かすれたような声であった。

「あなたの、連れということにしておいて……」

顔に似合わず、カサカサした女の声である。しかも、抑揚がない。命令するような言い方で、哀願しているという口調ではなかった。駄目ならそれでいいと、威張って頼んでいるといった感じだった。

男は、黙っていた。警官の列と女を、見較べただけだった。表情も動かなかった。

「いいのね」

「面倒なことには、ならないだろうな」

「多分……」

「好きなようにするさ」

そう囁き合^{ささや}って、男と女は殆ど同時に自分たちの荷物を手にした。男のは小型の、女のはやや大きいスーツ・ケースであった。二人は、並んで歩き出した。女が、スーツ・ケースを提^さげている男の左腕に、右手を巻きつけた。

警官の列の前を、二人はゆっくり通り抜けた。男は知らん顔で、女は反射的に俯向きかげんになった。二人の前後にも何人か、ターミナルを出て行く^いくとしてゐる同じ飛行機の乗客たちがいた。どの顔も、警官の目を避けていた。

「ちょっと、待って下さい」

不意に、そう声がかかった。誰もが、ハッとなった。自分が呼びとめられたのではないか、と思つたのである。しかし、私服刑事のひとりのはつきりと指さしているのは、右の掌に文鳥をのせてゐる男の顔であつた。刑事は、男を警官の列の後ろへ呼び込んだ。

男は、別に驚いたふうもなかった。ほかのことを考えてゐるような顔で、刑事の指示に従つた。いまになって男から離れるわけにもいかず、女もそのあとに従うほかはなかった。乗客たちが優

越感を誘示するように、男と女を露骨に眺めやりながら通りすぎて行く。

「名前は？」

刑事が、男を見上げた。探るような目をしているが、口許には笑いを漂わせて刑事の態度にも余裕があった。

「千波哲也……」

男は、右手を顔に近づけた。

「住所は、どこです」

「別に、どこって……」

「住所不定かね」

「そういうわけでもないな。九州の福岡市にある西日建設の本社に問い合わせれば、身許ははっきりする」

「それで、行く先はどこ？」

「別に……」

「それも、決まっていないのかね」

「ただ北海道へ、ブラッと来てみたただけなんだから……」

「連れの女性との関係は？」

「夫婦じゃないことは、確かだけどね。それ以上、説明するんですか」

「いや、結構」

刑事は、背後にいた上司らしい年輩の私服警官を振り返った。年輩の私服警官は、いいだろうというように軽く頷いた。

「どうも……」

刑事が、ターミナルの入口のほうを左手で示した。行っていくという意味である。男は掌の上の文鳥に、頬ずりをしながら歩き出した。文鳥が桃色の嘴で、男の唇の間を忙しくつつ突いた。女は歩きながら、更に深く男の腕に縋った。

ターミナルを出るとすぐ、男は駐車していたタクシーの一台を呼んだ。男が先に乗り込むと、女も当然というようにあとに続いた。男は別に、それを咎めようとはしなかった。好きなようにしろといった言葉に、男は忠実だった。いや、それ以上に女について、無関心なのかもしれないかった。

「どこへ、行きますか」

運転手が、背中と言った。

「札幌……」

男は、短く答えた。

「札幌のどこです」

車をスタートさせてから、運転手が重ねて訊いた。男は、女のほうへ目を転じた。女は何の意志表示もせず、ただふっと溜め息を洩らした。

「どこだか、決めてないんだ」

男は、文鳥をそつとコートのポケットの中へ押し込んだ。

「そいつは困ったな、お客さん」

「どこか、世話をしてくれないか。滞在が長くなるかもしれないから、小さな三流ホテルでいいんだ」

「知っているところが、なくはありませんがね」

「じゃあ、頼む」

「わかりました。ところでお客さん、空港の物々しい警戒ぶりには驚いたでしょう」

「まあね」

「東京の一流会社の社員が、会社の金五千万円を持って逃げたんだそうですよ。その際、邪魔にはいった同僚をひとり撲り殺したとかでね」

「指名手配か」

「それがどうやら、北海道へ向かったという情報があつて、あんな騒ぎになったんですよ。しか

し、その情報がはいったのは今日の夕方だというんだから、もう犯人は北海道へはいり込んでいるでしょうね」

「その犯人には、きつと情婦なり愛人なりがいるんだろな」

男は、苦笑しながら女に一瞥をくれた。

「さあ、そんなニュースはまだ聞いていませんがね」

運転手が、しきりと首をひねった。

「間違いなく、いるさ。とすれば、その愛人も犯人のあとを追って北海道へ来る」

男はピースに火をつけると、流れた煙を目で追った。女は、何を考えているのかわからない沈んだ横顔を見せて、微動だにしなかった。面積七八、五〇九平方キロ、日本領土の約二十二パーセント、スイスの約倍の広大な北海道の地を踏んだ男と女を待ち受けていたのは、明日の予測さえ不可能なことを象徴するような夜の闇であり、過去を振り向かない旅人の胸に迫る無常感であった。

タクシーの運転手に案内されたところは、なるほど見るからの三流ホテルであった。というよ